

Always 「K2P2エッセイ」～クミジョとクミダンのるつぽ～

【第7回】 「16%」の怪

本田 一成 ●武庫川女子大学教授 K2P2共同代表

内閣府「男女共同参画に関する世論調査（2024年実施）」によると、日本社会が「男女平等」だと考える国民は16.7%である。だが、男性に限ると21.9%で、男性の方が男女平等だと考える傾向がある。それ自体がトピックになりうるが、ここでは別の角度から「16%」の方を考えてみたい。

労働界で「クリティカル・マス」と言えば、女性役員の割合を30%や40%に引き上げる目標に使われるジェンダー理論で、ロザベス・カンターの著作が引用される。

他方、2023年に「連合ジェンダー平等推進中央集会」の基調講演「クミダンの壁ークミジョ・クミダン問題を科学する」で紹介したように、経営学では、クリティカル・マスはイノベーション理論で用いられる。代表的な研究者はエバレット・ロジャースである。要するに新製品が投入されても、新しもの好き以外は見向きもせず低空飛行だが、「16%」のシェアを超えると、急速に普及しイノベーションと呼ばれるようになる。

ちょっと待てよ、と思った次第。推定組織率は年々低下して、現在は「16%」である。それを下回ったら、イノベーションを起こすのと逆回転になるから、労組は「オワコン」の淵に立っているのではないのか。

毎年12月になると、推定組織率の継続的な低下が露わになり、労働界首脳から危機感あふれるコメントが出されるのが年中行事になっている。だが、「16%」を切ったら、組織率は低いからではなく、危険水域に入ったから問題だということになる。

再び、国民の男女平等観に戻ると、「16%」を超えると、「男女平等だ」という認識は急速に普及する。そう言えば、労働界でも、「男性も女性もない」「もう男女平等の時代だよ」などの言葉を好むクミダンが結構いる。

そんなクミダンがどんどん増えるのと、組織率が16%を切って逆転不可能なエリアに入っていくことと関係があるのか、ないのか。もし大多数の国民が考えているように、「日本社会は男女平等ではない」としたら、「男女平等の時代」という珍奇なイノベーション商品によって、国民の生活はどこへ連れていかれるのか。

労働界がそれを投影しているのではないか。「もう男女平等だよ」というクミダンは、クミジョの割合が絶対に30%や40%を超えないようにブレーキをかけているのではないのか。そんなイノベーターたちの姿は、労働者からどう映っているのであろうか。その通りだ、と賛同して一緒に活動するから組織拡大になるのか、それとも、そんな甘い認識や口先解決じゃ話にならないよ、と逃げていくのか。

たかが「16%」の話とは言っても、数字が何を伝えているのかを考える意味は深いように思う。

（続く）